

永瀬治郎教授を送る辞

斎藤達哉

永瀬治郎先生は、一九七八年四月に入職されてから、三十七年間に渡って専修大学の教育に尽力されてきました。二〇一五年三月をもって定年退職されることになりましたが、お元気で定年を迎えられることはまことに喜ばしく、心からお祝い申し上げます。

永瀬先生の御研究は、言語地理学からスタートされました。学部時代から、日本の言語地理学のパイオニアである柴田武氏のもとで学ばれ、長年の御研究が結実したのが、『山梨県言語地図集』（一九八八年七月、専修大学出版局）です。そこには、最初の赴任地であった山梨県をフィールドにした調査・研究が精緻に記録されています。同書巻頭の柴田武氏「研究はここから始まる」では、若かりし日の永瀬先生の姿をうかがい知ることができます。

言語地理学に立脚した御論考は、『専修国文』にも、「山梨方言の地理的研究小史―山梨県言語地図作成のために―」（二四号、一九七九年二月）、「山梨県言語地図」（中間報告）（二七号、一九八〇年九月）、「山形県村山地方の等語線について」（三三三号、一九八三年九月）、「山梨県言語地図」（中間報告2）（三七号、一九八五年九月）、「伊豆狩野川流域の方言調査―地理的分布図とグロットグラム―」（四二二号、一九八八年二月）、「東西方言の境界線附近の方言の現在と将来―岐阜、長野県境の方言について―」（四七号、一九九〇年九月）の各編を投稿されています。そして、本号には、方言のイメージについての調査研究「方言イメージの形成」をお寄せになっています。

また、永瀬先生は、一九八〇年代後半から専修大学でのキャンパス言葉の調査にも取り組まれています。一九九四

年から九五年にかけて、『月刊言語』（大修館書店）誌上での「キャンパスことば全国分布図（一）〜（二二）」の連載を担当され、キャンパス言葉の研究は、永瀬先生の代名詞となりました。『専修国文』にも「『キャンパス言葉』の造語法」（五〇号、一九九二年一月）を御投稿になっています。御研究が世に知られるとともに、学界では専修大学は社会言語学に強いというイメージが定着していきました。

永瀬先生は、「社会言語科学会」の創設者の一人でもあります。前身の社会言語学研究会時代から事務局長として手腕を振るわれ、学会設立間もない一九九九年六月からは会長代行として安定化に尽力されました。二〇〇六年から二〇〇九年までは第四代会長として発展に力を注がれました。

言語・コミュニケーションと人間・文化・社会とのつながりへの御関心は、『専修国文』に投稿された「よそで生れた新方言の伝播過程」（四六号、一九九〇年二月）、「霞ヶ浦の漁業語彙」（五五号、一九九四年八月）、「集団語の知識・使用と言語意識・パートナーティの関連について」（五六号、一九九五年一月。岡隆氏・池田理恵子氏との共著）、「スポーツ中継アナウンサーと解説者の評価について」（六五号、一九九九年九月）の各編によってもうかがい知ることができます。

さらに、先生の言葉と社会への御関心は、日本語だけに留まりません。『専修国文』には、北米大陸の先住民の言語の一つであるオジブエ語（Ojibwe 語）についての論考「オジブエ語の親族名称体系」（六一号、一九九七年八月）をお寄せになっています。CINJや国立国会図書館サーチで検索する限り、この論考がオジブエ語について日本語で記述した唯一のものとなっています。

永瀬先生は、思いやりと優しさをもって学生や若手教員を育ててくださいました。先生が会議で御発言になるとき、その背景には「学生に不利益になることはしない」というお考えが一貫してあったように思います。私自身、入

3 永瀬治郎教授を送る辞

職して右も左もわからない頃から、永瀬先生がメールや雑談の中でそっと助言や励ましをしてくださったことで救われた気持ちになったものです。社会言語学研究の盟友であった徳川宗賢氏の提唱されたウエルフェア・リングイステイクス（＝人々の幸せにつながる言語学）の精神がここにも表れていると言えましょう。

先生から教えていただいたことはまだまだ多くあり、専修大学のキャンパスを去られるにあたって惜別の思いは尽きませんが、日本語日本文学文化学会を代表し、感謝の気持ちを込めて送別の辞とさせていただきます。

二〇一四年十一月